

1. テキスト:「場所」「二」の第2段落。231頁1行目~232頁5行目まで。
2. テキスト講読

次いで「カントの意識一般」が「対立的無の立場から絶対的無の立場への入口」であることが述べられる。まず意識一般は「すべての認識の構成的主観」であるならば、そこに「於てあるもの」はすべて「妥当するもの」となるから、それは「真の無の場所」でなければならぬとされる。「妥当するもの」となるということが「一般妥当的」ということであり、すべてが「真の無の場所」という「具体的一般者の繫辞」となることである。それ故「是に於て、すべて存在的有は変じて繫辞的有とならねばならぬ」と言われる。すべての主語的(がある)存在が述語的(である)繫辞になるということである。「がある」が絶対的無の場所の「である」となるということである。このこととこの場所が「対象をありのままに映す」(221,11-12)場所、さらには〈生滅の場所〉ないし〈矛盾〉の場所であることと別のことを言っているのではあるまい。

しかし「意識一般も尚真の無の場所ではない」と述べられる。それは「対立的無の立場から絶対的無の立場への入口に過ぎない」とされ、それを越えて「叡智的实在の世界」すなわち「理想即实在の世界」があるとされる。この「叡智的实在」「理想即实在」は先の「妥当」を引き継いだものである。物自体、自我自体、宇宙、自由、神を始め、プラトンのアイデアをも含意し得るが、全体的にはカントの目的の王国をイメージし得るかもしれない。こうした意識一般から叡智的实在の世界への移行を、西田は「カントの批評哲学を越えて尚形而上学が成立する」事態として述べている。

カントの意識一般における「対立的無の場所」から「真の無の場所」への移行の過程を西田は次のように述べる。まず「有るものは何かに於てなければならぬ」と、場所論の有論的テーゼが提示され、「論理的には一般なるものが、その場所となる」と論理的テーゼ(一般者の自己限定)がそれに重ね合わせられる。次いで「カントが感覚によって知識の内容を受取ると考えた意識は、対立的無の場所ではなければならぬ、単に映す鏡でなければならぬ、かかる場所に於て感覚の世界がある」と、意識一般の「対立的無の場所」の側面が述べられる。「単に映す鏡」とは「外を映す鏡」(231,10)「単に物の影を映す場所」(221,5-6)のことである。しかし「意識一般はかかる意味に於ての意識ではない」と、意識一般の「真の無の場所」の側面が述べられることになる。「所謂意識作用も之に於てある場所ではなければならぬ、対立的無を含む無でなければならぬ」と、主客対立の内にある意識作用の全体が映される意識一般の側面が述べられる。これは『善の研究』の第2・3編の全体が第1編の純粹経験(現在意識)において捉え直される事態に相当するであろう。この鏡は「外を映す鏡ではなくして内を映す鏡でなければならぬ」とされる。外を映す鏡は常に影を映す。ありのままを映す鏡は「内を映す鏡」でなければならぬ。こうなると我々のイメージを破壊しなければならない。「包む」ということも風呂敷が物を包むというように理解することはできないし、「於てある」も机の上に物がある、という様には理解できないであろう。

次いで「真の無の場所に於ては、かくの如く妥当するものが即ち存在でなければならぬ」と述べられる。存在の意味が感覚から妥当に移ったことを意味している。妥当とは真であると同時に意味であり価値である。それ故「此の如き真の無の場所に於ける存在の世界は、純粹思惟の対象界にあらずして、純粹意志の対象界と考えることができる」とされる。これは「状態としての自由」(229,4)の世界である。

そうして「対立なき対象がその於てある場所(対立的無の場所)に映されることによって、対立的対象を生ずる如く、真の無の場所に於てある叡智的存在即ち純粹意志の対象に対して、[それがその於てある場所(対立的無の場所)に映されることによって]その対立的対象の世界即ち反価値の世界が成立する」(カッコ内引用者)と述べられる。ラスクの超対立的対象が主客対立の判断作用の領域において当る、当らぬという所謂真偽の対立にもたらされるのと同様に、目的の王国の如き絶対善、絶対美の理念の世界が判断作用(対

対立的無の場所)の領域にもたらされることによって善悪、美醜の「対立的対象の世界」「反価値の世界」が成立する、というのである。

「此の世界」すなわち「純粹意志の対象界」においては「広義に於ける善のみ実在であると云い得る」とされる。そうしてアウグスティヌスが引き合いに出される。これは『善の研究』第3編13章と同様である。そこでは「アウグスティヌスに従えば元来世の中に悪という者はない、神より造られたる自然は凡て善である、唯本質の欠乏が悪である。又神は美しき詩の如くに対立を以て世界を飾った、影が画の美を増すが如く、若し達観する時は世界は罪を持ちながらに美である」(1.165,1-3)と述べられている。

そうして「此世界に於ける意志作用は認識の世界に於ける判断作用に相当する」と述べられる。「此世界」とは「純粹意志の対象界」であるが、そこには作用はない。作用は「対立無の場所」に意志が映されることによって生ずる。それは「知る」ということが「対立的無の場所」の場所に映されることによって認識作用(判断作用)となるのと同様だ、というのである。(自由)意志が対立無の場所に映されることによって「作用としての自由意志を見る」(229,3)とすでに言われていた。作用(当為)が意識されるのは主客対立の領域においてのことである。真の無の場所ではあるがままであるから、こうした作用は見られない。そうして「唯、真の無の場所に於てのみ自由なるものを見ることができるとされる。

かくして「限定せられた有の場所に於て働くものが見られ、対立的無の場所に於て所謂意識作用が見られ、絶対的無の場所に於て真の自由意志を見ることができるといふように総括される。文中「働くもの」は純粹な作用ではなく、働く主体としての「もの」を残したものである。また「真の自由意志」とは「作用としての自由意志」ではなく「状態としての自由」(229,4)のことである。

日常的に我々は一定の目的(「限定せられた有の場所」)のもとに反省以前という在り方で没我的に働く。それが破られて不意に我々は意識作用の世界に目覚める。こうした意識作用の世界は常に価値対立の世界(あれかこれか)の世界、惑い(迷い)の世界である。我々は善か悪かの二者択一の選擇的意志によって、そのつどの善を選ぶが、人生全体の善が問題になる時、その善は道徳的善(叡智的实在)となり、意志も個別的意志から道徳的意志となる。この意志が善そのものを求めるところに道徳的な意志作用が成立する。ここではなお善悪対立の世界(対立的無の場所)である。それが行き詰る。悪に躓く。そこにアウグスティヌスの「達観」が開かれる。そこが「真の無の場所」ないし「絶対無の場所」である。この過程がまさに『善の研究』は第2・3編から第4編への移行であると考えられる。モチーフはすでに西田の思索の初期にあると言えよう。こうした理解がテキストの以下の部分の解釈を支える。